

氏 名 川島 史也  
学位の種類 博士（芸術学）  
学位記番号 博甲第 9159 号  
学位授与年月 平成 31年 3月 25日  
学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当  
審査研究科 人間総合科学研究科  
学位論文題目 彫刻表現としての木心乾漆の研究

主査	筑波大学教授	博士(芸術学)	大原 央聡
副査	筑波大学教授	博士(芸術学)	中村 義孝
副査	筑波大学教授	Dr.Phil.	長田 年弘
副査	大阪成蹊大学講師	博士(芸術学)	江村 忠彦

## 論文の内容の要旨

川島史也氏の博士学位論文は、木彫によって造形された形態に木屎漆や錆漆を用いて、さらに造形行為を行うことで完成に至る木心乾漆とその彫刻表現について論じたものである。その要旨は以下の通りである。

### （目的）

本論文は木心乾漆による彫刻表現の可能性を追求し、その造形的特質を明らかにすることを目的としている。

### （対象と方法）

本論文では奈良時代に仏像としてつくられた木心乾漆像や、日本の戦後に木心乾漆による彫刻表現を試みた新海竹蔵（1897-1968）の木心乾漆作品の実見調査と文献調査を行なっている。また、著者による木心乾漆の制作実践によって実証的研究が行われている。

第1章では、仏像制作技法としての木心乾漆について考察している。木心乾漆の研究は美術史の観点と保存修復の観点による先行研究が多く存在する。久野健（1920-2007）や本間紀男（1932-2015）等によるX線を用いた研究によって木心乾漆の内部構造は明らかになってきている。これらの先行研究と実見調査から得られた知見を基に奈良時代の木心乾漆像の技法と構造を明らかにしている。

第2章では、木心乾漆を彫刻表現として試みた彫刻家新海竹蔵に着目し、木心乾漆独自の表現について考察し、その特徴の一端を見出そうとしている。新海の彫刻制作に関する資料と作品の実見調査によってその造形的特質を浮き彫りにしている。

第3章では、現代では多様となった乾漆表現はこれまでどのような表現の試みがされてきたのかを確認しその表現内容について考察している。方法として天平時代以降に用いられることがなくな

った乾漆技法が彫刻表現の制作技法として活用されるようになる明治を起点として言及している。次に戦後から現代までの乾漆表現について山本豊市（1899-1987）、佐藤守男（1957-）、保井智貴（1974-）の作品考察を行っている。

第4章では、まず木心乾漆の「木心部」と「乾漆部」についてそれぞれが有する技法的特質を示している。次に、各章ごとの考察によって得られた知見を基にして、著者による制作実践を通して木心乾漆の造形的特質について実証的に考察している。

#### （結果）

各章の検証・調査・考察を基に、木心乾漆とはどのような彫刻表現であるかを言及し、次いで木心乾漆の造形的特質とは何かを纏めている。

日本の古代において奈良時代につくられた仏像の木心乾漆像と、近代以降における新海竹蔵の彫刻表現の制作例に鑑みて、木心乾漆とはどのような彫刻表現であるかについて「木彫によって造形された形態に乾漆によって肉付けを決定していく彫刻表現」であると著者は提言している。ここで言う「肉付け」とは、「彫刻における凹凸の具合」のことを意味している。これは、単に乾漆が表面を滑らかに整えるために用いられているのではなく、形を追求するための必然的手段であることを示唆している。

木心乾漆の造形的特質の一つとして、構造として内包する木彫表現の形態感が表面の乾漆表現に反映されることが予想されることから「木彫の制作過程で獲得される『強い面で構成された形態感』を内包している」と述べている。これは、木心乾漆が強い構築性を持った彫刻表現になり得る可能性を示している。木心乾漆は、彫像内部の木彫と、彫像表面の乾漆の両方の造形によって形を追求していく技法であるが、この二つのうち、木彫は外から内へ向かって彫り進め、乾漆は内から外へ材料を貼り付けていくことで形を追求するものである。そのため、木彫と乾漆の造形思考は、互いに逆行するものであることを著者は指摘する。一見矛盾しているかのように思われる二つの造形思考によって表現される木心乾漆は、最終的にわずかに厚みを増減しながら求める形態に合致するまで揺らぐようにして形が決定されていく。この「木彫と乾漆による狭間の造形」とも言い表せる造形行為によって木彫と乾漆それぞれ単一の技法のみでは表し得ない木心乾漆独自の「肉付け」が表現されると著者は述べている。そして、木心乾漆は木彫表現と乾漆表現が一つの作品上に混在する複合的表現が可能であることを指摘している。「木彫と乾漆の複合的表現」によって木心乾漆独自の形態感と質感が表現されると述べている。

また、本研究の中では「木屎漆」の研究も行われている。古典の木心乾漆像の技法の中では錆漆や漆箔によって覆い隠されていた木屎漆を乾漆表現の最終表面素材として活用することで今までにない新しい乾漆表現を作品として示している。

#### （考察）

これまで、木心乾漆の研究は保存修復や美術史的観点によるものは多く存在するが、彫刻制作の観点から木心乾漆の造形性に関する研究はほとんど行われてこなかった。このような状況から、木心乾漆の表現性について調査・考察を行い明らかにすることは乾漆表現の研究に一石を投じるものであり意義のあるものと言えるだろう。各章の考察で得た知見を基に著者による制作実践によって、木心乾漆による彫刻表現の可能性を作品として実証的に示し、結語において木心乾漆とはどのような彫刻表現であるのか、その造形的特質とは何かについて言語化し提言している。また、戦後から現代における乾漆表現には「錆漆」が主に用いられている中で、奈良時代の主要な乾漆造形素材であった「木屎漆」に改めて焦点を当て独創的な研究と実践を行っていると言っている。

## 審査の結果の要旨

#### （批評）

彫刻制作者の観点から、現代における木心乾漆表現のあり方について文献・現地調査、ならびに制作実践による省察を重ねてまとめられた独創性ある論考であり、評価することができる。著者が触れている通り、これまで乾漆については修復学的見地から調査・検証がなされる機会が多かった。

これらの修復学的な研究は、対象となる彫像に関する美術史的な位置づけと密接に結びついており、対象となる像の客観的把握と保存に重点が置かれてきた。これに対して、著者の研究は、自ら彫刻制作に携わる者として、木心乾漆という専門的な技法の理論と実践の両側面を追及して、新たな表現の地平を開こうとするものである。

モデリングとカーヴィングという相違する造形行為がひとつの技法に共存する木心乾漆の特性について、制作者の経験を基礎に丁寧に解き明かしている点は評価することができる。また、筆者の制作実践において、木屎漆を用いた仕上げという造形行為に関する技法的効果の検証についても筆者の新知見があるといえる。

本研究は、美術史的な観点を踏まえた作品の実見調査に基づいており、さらに制作実践を交えることで、相互補完的な考証がなされている点において高く評価しうる。その点において本研究が、彫刻のみならず美術表現に関する領域において、更なる多様な可能性を導き出す契機となることが期待される。

平成31年1月16日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（芸術学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。